

サンズで購入しようとしたのは二丁の六連発ピストルと、一丁のライフル銃である。どちらもチャンスが吟味した、最新式の銃だった。

「弾がなければ、銃はただの模型だ。弾丸は銃以上に大事だぞ」

実戦を経験したチャンスの言葉は重たい。店主は知らぬ顔だったが、チャンスが話していることや、選ぶ銃は横目で捉とらえていた。

「分かりました。ここに留めます」

ジョン・マンはピストル用の二十四発入り弾丸を十箱、ライフルの十二発入り弾丸を二十箱、それぞれ購入することにした。

背丈が六フィートもある店主が、手を叩いて驚いたほどの大商おおあきないである。

店の口開けの客がジョン・マンだったのだ。

「大きなお世話かもしれないが」

親爺おやじはテーブルに置かれた商品の山を見ながら問いかけてきた。

「これを持って、どこに行こうというんだ、アミーゴ？」

米国南部と西海岸とで戦闘を続けたメキシコ人の血が、店主には流れていたようだ。

「ゴールドラッシュ真っ只中の、ノースフォークに行きます」

こう明かしたら、親爺はいきなり機嫌きげんがわるくなった。

「あの一带は、元々は我が祖国メキシコの領土だったものだ」

勘定するために積み上げてあったピストル、ライフル銃、そして弾丸箱の山を、親爺は脇にどけた。

そして店の奥に入ると、白いシャツを手にして戻ってきた。

「あんたに売る品物はない」

親爺は山積みにした品々にシャツをかぶせた。売る気はないと、態度で示したのだ。

「どういふことだ、わけが分からん」

温厚な物言いを常とするチャンスが、声を荒らげた。

「どうもこうもない」

親爺はあごを突きだした。大柄な男だけに、ジョン・マンを見下ろしていた。

「我が祖国に侵略を企てようとする者になど、わしに売る商品はないということだ」

帰ってくれと、親爺は手でふたりを追い払おうとした。

「あなたは大きな勘違いをしています」

親爺の目を見上げて、ジョン・マンは静かな口調で話を始めた。

「あなたの祖国メキシコは、いまから十三年前のテキサス州サンアントニオでは、テキサス革命で勝利を収めています」

そのことについて、あなたを責める者など、この町にはいませんと、口調は変えずに言い切った。

親爺は両目を尖らせてジョン・マンを睨み付けた。その形相を見たチャンスは、心配げな顔を

ジョン・マンに向けた。

もしも親爺が手出しをしたら、チャンスよりも大男なのだ。どう防げばいいかと、心配している表情だった。

ジョン・マンは気にせず、変わらぬ静かな物言い話続けた。

「三年前の一八四六年からつい去年まで、メキシコはまたアメリカとの戦闘を始めました。しかも今度はテキサス州に限らず、ニューメキシコやカリフォルニア州とも戦闘に突入しました」

ジョン・マンは親爺を見上げた目の光を強めた。

「しかもあなたの祖国は、自国にまで攻め込まれたうえで、手痛い敗戦を味わったのです」

誤解の入り込む余地のない、明確な言い方でメキシコの敗戦を親爺に示した。

年号まで正確に指摘されて、親爺の表情から尖りが薄れていた。

ジョン・マンはさらに先へと続けた。

「カリフォルニアがメキシコの領土を割譲されたのも、あなたの祖国が国力を過信した無謀な戦争に突入した結果でしょう」

黙って聞いていた親爺が、ここに至り不意に口を開いた。

「あんた、いったい何者だ」

ジョン・マンの身なりをしばしばと見詰めた。制服の肩章を見て、兵隊と勘違いしたのかもしれない。

「これだけの銃と弾丸を持って、ゴールドラッシュの土地を襲撃でもする気か」

親爺は正味で恐れたらしい。

「そんな相手には、なおさら売るわけにはいかんぞ！」

素早く身を屈めると、護身用のライフル銃を手に持って立ち上がった。銃口はジョン・マンの胸元に向けられていた。

「落ち着いて下さい。わたしは兵士ではなく、捕鯨船の副長です」

ジョン・マンは穏やかな物言いに応じた。こちらが緊張していたら、相手はさらに気を昂ぶらせる。

「いらんことは言わんと、いることばあを、相手を見ながらゆっくり言えや」

落ち着いて話すのが大事だと、遠い昔、船頭の傳蔵から教わったことだった。

効き目はすぐに現れた。

「なぜ捕鯨船の副長が、これほど大量の弾丸を手にして、ノースフォークに行くんだ」

「金鉱掘りで稼ぐためです」

即座に答えたジョン・マンは、ジャパンが故郷です、サンフランシスコからの帰国の船賃を稼ぐために行くのだと、落ち着いた物言いの説明した。

「あんたも祖国に帰りたいのか」

親爺はライフルの銃口を下に向けた。

ジョン・マンが話を引き取った。

「ゴールドラッシュ目当てに、あちらこちらからならず者が押し寄せているかもしれません」

その備えてピストルとライフルを購入するのです……ジョン・マンの言い分に、親爺は深く得心したようだ。

「ピストルだけではなしに、ライフルを用意するとは、あんた、戦闘を知っているようだな」
感心したという物言いになっていた。

「わたしではありません、連れてきてくれたチャンスから教わったことです」

この返答を聞いて、親爺は初めてチャンスを見詰めた。そして即座に得心した。

「あんた、実戦をくぐってきただろう？」

「自慢することではないが、その通りだ」

チャンスが答えると、親爺はライフルをテーブルに置いた。そして右手を差しだした。

「ドメニオだ」

「チャンスだ」

同年代に見えるふたりが、握手を交わした。

「銃よりも弾が大事だとあんたが言ったところから、気にはしていたんだが……」

すっかりふたりにこころを開いたドメニオは、サンズで一番の銃を選んだとチャンスの眼力を褒めた。

「ノースフォークでいい稼ぎがあるように」

ドメニオはジョン・マンにも右手を差しだした。買い求めた弾丸とピストル二丁は、布製の袋に収めてくれた。

「これは袋がない」

剥き出しで抱えて帰ってくれと、ドメニオは告げた。

「そんなこともあろうかと……」

チャンスは折り畳んだ布を取り出した。デイジーが持たせたタータンチェック柄の布である。手際のいい包み方で、チャンスはライフル銃を布でくるんだ。

「さすが実戦経験者だ」

チャンスの用意のよさを親爺は褒めた。

「神のご加護があるように、アミーゴ」

ドメニオの声に送られて、ふたりはサンズを出た。分厚い雲は、さらに厚みを増して空に貼り付いていた。

*

スコンチカットネットクに帰ったときは、ランチタイムを過ぎていた。

「ポテトとソーセージエッグだけど、それでおなかは大丈夫かい？」

昼飯後に予定している射撃練習を、デイジーは案じていた。

「大丈夫だ、それほど激しい動きをするわけじゃない」

弾丸も無駄にはできないからと、チャンスは続けた。

「ライフルは狙い^{ねら}いをつける、その形から練習する。ピストルは六発も撃てば、ジョン・マンなら使い方を身につけるに決まっている」

チャンスの返答に得心したのだろう。デイジーは大皿に山盛りのポテトと、卵二個を使ったソーセージエッグを調えた。

しつかり食べ終えたあと、コーヒを味わいながら、チャンスは弾の込め方から伝授を始めた。ピストルのシリンドーを取り外し、六発の弾を込める。簡単なようだが、チャンスは何度も同じことを稽古させた。

二十四発が詰まっている箱の弾丸をすべて取り出し、新たに込めるたびに違う弾を込めさせた。「シリンドーに込めたあとは、閉じる前に弾の尻をしっかりと見ろ」

何発もの弾を手に持ったチャンスは、それぞれの弾の尻を指の腹で撫なでた。

「おまえもやってみろ」

弾を手渡してから、ジョン・マンにも同じように人差し指の腹で、弾の尻を撫でさせた。

「どんな感じだ、ジョン・マン？」

「どれも同じで、滑らかです」

答えを聞いたチャンスは、満足げな顔でうなずいた。

「サンズのドメニオは、仕事熱心な親爺だ」

箱に詰まった弾は一発残らず、仕上がりを確認していると判じた。

「出来のわるい弾は、撃鉄が当たる部分に疵きずがあったり、でこぼこがあったりする」

不良品の弾は、いざという場面で不発となったり、暴発したりする。

「サンフランシスコまでの船旅は長い。その間の空き時間を使って、念入りに弾の尻を撫で回し

ておけよ」

尻を撫で回す

片付けものをしていたデイジーが、豊かなヒップをブリッと動かしした。

「おまえの命を守ってくれる弾だ。手抜きはするな」

「はいっ」

きつぱりと答えたジョン・マンに、デイジーは思案顔を向けていた。

まるで戦場に向かう息子を家から送り出す、慈母のようだった。

(つづく)